

「言葉」の持つ力

言葉には、大きな力があるように思えます。

自分の言った言葉で後悔したことはありませんか。それは、その言葉が、相手の身体を傷つける暴力と同じように、相手の心を傷つける力があるからだと思えます。そしてその力は自分に向かつてくることもあるのです。

相手を思いやり、いたわり、共感する言葉を持つ力も、同じように大きいものです。優しい言葉を使えば、最初にその言葉を耳にするのは自分であり、自分も優しさに包まれるのではないのでしょうか。

次のような記事を読みました。
『母親が、もうすぐ中学生になる娘に、チューブから絞り出した歯磨き粉を見せて「これを元に戻してみて」と言うと、娘は「できない！だって、元通りにはならないもの」と答えた。それを聞いて母親は「よく覚えておいて。私たちが発する『言葉』は、使い方に

よっては人の生死を脅かすほどパワーがあるものなの。中学生になるあなたが発する言葉は、

これから重い意味を持つようになるわ。この歯磨き粉のように、一度口から出た言葉は、もう心の中に戻すことはできないのよ。だから、自分の言葉に十分気を付けなさい」と娘に話した。』

子どもたちの間で、相手を傷つける言葉を使ったり、自分に使われたりしている現状があります。
「死ぬ」「むかつく」「おまえしやべるな」「うせろ」「消えろ」「近寄るな」「キラライ」「きもい」「チビ」「うざい」「にぶい」「汚い」「ガイジ」「バカ」「あつそー」などの言葉です。

これらの言葉は、子どもたちが『言われてイヤだと思った言葉』でもあります。また、『イヤな言葉』とは逆に、「ありがとう」「だじょうぶ」「がんばったね」「大好き」「ファイト」「どんまい」「助かった」「手伝おうか」など『言われて元気の出る言葉』も子どもたち

ちは知って使っています。

今、子どもたちは、「人と人の関係を切る言葉」よりも、「人と人をつなぐ言葉」を求めています。

この記事の母親は、最後にこう締めくくっています。「どうか、言葉の使い方を見違わず、誰かがあなたを必要としていたら、迷わず優しく接してあげて。あなたは、それができる人なのだから」と。

そこには、我が子への心からの信頼と期待があふれていると感じました。母親のこのような言葉は、成長していく子どもにとって、きつと大きな後押しとなり、これからの人生の支えになるでしょう。

子どもたちは、おとなが使っている言葉を聞いて、しっかりと覚えていっていることを忘れないでほしいものです。

参考・引用
南国市発行
「人権学習シリーズ」

市人権推進課(教育庁舎1階)
☎ 32・2122
FAX 33・3525
Mail:jinkensuishin@city.komatsushima.tokushima.jp

市民文芸 花みずき歌壇 (331) 松並敦子・選

人気なき横須海岸にこたわらず寄せては返す波の独演

横須町 山崎 泰子

《評》私が小松島市の住人になった五十年前の横須海岸は海水浴場があり、海の家もあって多くの人で賑わっていたのを思い出す。「人気なき」「波の独演」の語から伝わる今昔の感と、海は悠久に一定のリズムで波の音を聞かせてくれるという事実を詩として昇華させて巧みな作品。

誤差のなき電波時計に導かれきようも穏しく(へ時)移りゆく

田浦町 西 照子

書店にて眺め手に取る日記帳やはり私は大学ノート

横須町 福島 夢栄

年賀状来年からは遠慮しますそんな添え書き目立ちはじめ

田浦町 太田カツミ

もろもろの背負いしものを解きつつ喜寿の一步を踏み出す
あした

立江町 湯浅かや子

年明けは寒波襲来古希となり寒さに勝てず炬燵で一杯

中田町 倉橋 正則

また一つ歳が大きく膨らんでいつの間にかやら八十八歳

坂野町 橋本千代乃

夫逝きて息子の家に移りたる友より幸せとの電話ありう
れし

横須町 三宅 敏恵

やるせなき事件の続く新聞に欠けたカップを包んで捨てる

立江町 大西 和美

パソコンに作り溜めたる短歌五百突然消えてあとは泥沼

ひのみね総合療育センター 関 政明